

# サルから学んだ大切なこと

## さき

8歳、小学校2年生  
兵庫県在住



山の斜面を利用して40年前に作られた淡路島モンキーセンターでは、180頭の野生のサルを餌付けています。山で暮らすサルは、朝9時ごろセンターに姿を現し、夕方5時ごろ山に帰って行きます。秋には山に多くの木の実がなるので、サルはセンターには来ません。所長を務める延原さんのこども、さきちゃんは小学校に入るまで、両親が働くこのセンターで一日の大半を過ごしていました。今でも、放課後や夏休みはセンターで過ごします。サルとはすっかり仲良しで、ケンカをするほど心を通わせています。そんなさきちゃんとサルとの触れ合いがテレビでしばしば取り上げられ、心温まるやりとりが多くの人に感動を与えています。今号は、さきちゃんとご両親に話を聞きました。

Q：いつからサルと遊ぶようになったの？ 何をして遊ぶの？

さき：たぶん1歳ごろから。気がついたらサルと一緒にいた。水かけっこしたり、木の実を探す競争をしたりして遊ぶの。お母さんが隠した木の実を探すんだけど、大体さきが勝つ。だって、お母さんがどこに隠してるのかこっそり見てるから…（笑）。そうやって遊ぶのも楽しいけど、赤ちゃんに餌をやるときがいちばん楽しい。

Q：このサルにはほとんどに名前がついているけれど、区別はできるの？ 誰が名前をつけるの？

さき：うん。ほとんどわかるよ。顔が違うから。赤ちゃんが生まれたら、さきかお母さんかお父さんが名前をつける。さきがつけた名前は、「りぼん」とか「ケーキ」とか。トロロはお母さんがつけた。自分が名前をつけたサルも、そうじゃないサルも、みんな



トロロとさきちゃん。トロロと時々ケンカもするが、とても仲がいい。さきちゃんに顔を触られてもトロロは怒らない

同じでかわいい。

母：さきは、サルの識別がいちばんよくできます。教えたわけじゃないんですけど、自然にできるようになりました。

Q：今まででいちばんうれしかったことは何？

さき：5歳のときに、生まれたばかりの赤ちゃんを抱っこしたこと。お母さんザルが赤ちゃんのすぐ斜め後ろにいたんだけど、赤ちゃんがすごくかわいくて、思わず抱っこしたの。

父：そんなことをされたら、母ザルは普通怒るんですよ。母ザルだけじゃなくて、ほかのサルも怒ります。さきは小さいころからサルと一緒にいるし、今もまだ小さいから、「まあ、いいかなあ」と許したんでしょう。さきがやることを大目に見ているなあと思うことはほかにもありますね。

母：赤ちゃんザルを初めて抱っこしたときは、本当にうれしそうでしたね。それから、テレビ番組の撮影をしていたときに、トロロが初めて体を触らせてくれたのもうれしかったようです。そのときの映像を見たら、さきの顔は本当に満足そうです。普通、野生のサルは触らせてくれませんから。

Q：じゃあ、今まででいちばん悲しかったことは？

さき：6歳のとき、おばあちゃんと散歩していたら、メスで

50cmぐらいのサルが死んでるのを見た。高いところから落ちたか、犬に襲われたんだと思う。お母さんにそのサルを埋めてもらった。すごく悲しかった。それから、7歳のとき、サルの餌になる木の実をお父さんと一緒に探していたときに、サルの頭蓋骨を見つけた。頭蓋骨だけがそこにあった。すごくショックだった。お墓を作ってあげた。

父：そのとき、さきはそんな様子は見せなかったですね。弱いところを見せるのがいやなのかもしれませんが、強がる場所があ



生後1週間の赤ちゃんザルを初めて抱っこしたさきちゃん

るんです。でも、あとでお墓を作ったりしたのを見ると、やっぱりショックだったんだと思いますよ。私たちがサルの死に遭遇することはあまりないんです。餌場でサルが死ぬことはないから。これまで餌場に来ていたサルがなくなったときに、今はまだ「いないなあ」と思っているのですが、そのうち、「いなくなる＝死」ということがわかってくるでしょう。そのとき、どうやって受け入れるのか、乗り越えていくのか。必要なことだと思いますが、少し心配ですね。

この山には奇形のサルが多く、180頭のうち30頭は何らかの障害を持っています。センターが開所して間もないころ、足が1本もない赤ちゃんザルを抱えた母ザルが常に抱っこしていることに疲れ、木から落としそうになったのを初代所長であるさきちゃんのおじいちゃんが見つめて、コートと名づけて自分の手元で育てました。そのコートのことを忘れないように、コートの像がセンター内に建てられています。

Q：コートのこと知ってる？ 足のないサルもいっぱいいるけど、どう思う？

さき：コートを育てて、おじいちゃんは偉いなああって思う。でも、そのことを知ったとき、お母さんじゃない人に育てられて、ほかのサルと仲良くできるのかなあ、大丈夫かなあって心配した。

父：さきは障害をもったサルを特別視していません。ここのサルは、障害をもったサルに自然とあわせて、行動範囲やスタイルを変えています。移動するスピードを落としたり…。序列はもちろんあるけれど、弱いものを助ける。切り捨てたり、放置したりしないんです。障害をもったサルも含めて一つの群れ、一つの社会をつくっているんですよ。

Q：サルと毎日接していて何か考えさせられることはある？

さき：ない！ だって、これが普通だから。

Q：お父さんやお母さんは、さきちゃんにサルとの触れ合いを通



「ボース！ ボース！」と呼ぶとサルが集まる。餌やりと水の交換がさきちゃんの仕事だ

じて何を学んでほしいですか？

父：これを学んでほしいというのはあまりないんです。さきはほかの子どもができないような経験を毎日しているんですが、いいのかわかりません。でも、悪いことではないかなあと思っています。助け合って生きるということを肌身をもって知っているから。さきは言葉では言わないんですが、さきの行動を見ていたら、いろいろ考えているんだなあと思うことはよくありますね。お墓を作ったのもそうですし、サルの出産に立ち会うことがよくあるんですが、そのときのさきはすごく真剣で、周りが騒がしくしていると、「静かにしてください」って言ったりしますね。

母：私もこれを学んでほしいというのはあまりないんです。自然に学ぶだろうと思ってます。こちらが教えようとすると、逆に拒絶してしまいますからね。



野猴经常在新闻里登场，它们到人们家里胡闹、在旅游景点抢包、给人类带来危害，在很多人的印象中，野猴成了野蛮、凶暴的代名词。但是，淡路岛野猴保护中心的猴子却很守本分，在保护中心里给猴子们喂食的时候，人就进入笼里，在笼里喂食当场买来的带壳花生。猴子们知道只能从站在笼里的人那里获取食物，因此不会向笼外的人索要吃的。但是，有人觉得猴子很可爱，从包中取出食物随意喂食，如此一来，头脑聪明的猴子便明白，不管在哪里、无论从谁手里都能获得好吃的东西，于是逐渐开始袭击人们。和利先生说：“希望媒体报道保护中心，让大家明白这种与猴子相处的方法，从而改变人们对野猴的看法。其次，还希望能够以此为契机，让人们了解野猴所处的状况，并让人们开始思考人与自然的关系。”此外，“这个保护中心开设当时，因为猴子严重破坏庄稼，为了缓解这种状况，考虑了在一个地方集中进行喂养的方法。当然，最理想的是不对野猴进行人工喂养。但是，它们现在无法立刻回到野生状态中，因为能让猴子们安心栖身的山林没有了……。希望终有一天，人类要进入山里，才能看到野生的猴子。”和利说出了自己的梦想。



喂食的时候，人进入笼里。在笼子外面，挂着“哺乳类：人类”的牌子。